

暗闇と走光性

孤独とは停滞である。体育の授業中、男子は校庭全面を使ったサッカーの試合、女子は校庭の隅でペアとなつての自主練習。暇を持て余した女子達はそんな決められたペアなんか無視して、散らばるのだ。各々の自主性を持って今自分を一番輝かせられるポジションへと移動を開始する。これもまた、ある種の競争性を持った試合である。こういった時、私の様な人間は様々な方向から生まれる波に揉まれ停滞する。そして、立ち止まった足元は孤独にすぐわれるのだ。俯くしか

ない。黙るしかない。一步でも動けば、私はここに立つてはいられない。なる。く。

「村主^{すぐり}さんも、一緒に蟻の観察する？」

なんの前触れもなく話しかけられて私は驚いて目を丸くした。その声の主は私の決められたペアである長谷川^{はせがわ} 蝶々^{はびる}というクラスメイトだった。彼女は校庭の隅の隅の木陰で、グラウンドに背を向けてあぐらをかいて座っていた。私もこうなればいいのだろうか。いっそ停滞すらやめて、どこか一点を見つめ現実逃避することも一つの手だとは思ふ。けれど、彼女の振り向くこともせず動じない背中に私は自

分自身を重ねることはできなかった。

「楽しいの、それ？」

私は彼女に近寄って、まるで幼稚園児に保育園の先生が優しく話しかけるかの様に尋ねる。彼女は懸命に一匹の蟻が地面を這う様を見つめていた。私のそれまでの彼女の印象といえば、変わった子ではあるが確かに他人に舐められることだけは嫌っていて、芯のある、孤独というより孤高が似合う子。それでも、丸めた背中に私は見下した態度を取ってしまった。彼女と同じ目線で話をしようとは考えなかった。私が後ろから見守っていると彼女はやっと私の方を振り返り、き

つぱりと答えた。

「楽しいよ。」

そう言い切れば自分の仕事はもう済んだと思ったのか、彼女はその後またすぐに私に背を向けて俯いたまま動かなくなった。

「長谷川さんは、虫が好きなの？」

気まずさをかき消す様に私が訊く。

「まあ、うん。そうだね」

宙を仰いで曖昧な答え方をしたが、彼女が女子にしては珍しい虫好きであるということは見た通り確からしい。私も前屈みで彼女の観察

対象である蟻を目で追っていたら、彼女のエリアから外れて私の立っている方までそいつは何食わぬ顔でやって来た。彼女はそんなことお構いなしに身体を捻ってそのまま観察を続ける。

「うわあ」

遂には私の運動靴の先にまで侵入して来て私は声を上げて後退りする。

「村主^{すぐり}さんは、虫嫌い？」

彼女は上目遣いで私に訊く。

「まあ、苦手ではあるかな」

「そっか」

あからさまに彼女は落胆した様に肩を落とした。またもや訪れた気まずさに私は再び口を開く。

「蟻の観察してて、何か発見とかあるの？」

彼女は私を氣遣ってか蟻を素手でおむすびを握るようにして捕らえ、その質問に眉をひそめながら答えた。

「発見とかじゃなくて、なんて言うのかな。無に、なれるんだよね」
捕らえた蟻を指の隙間から盗み見ながら、彼女は地面に呟いていく。
「何か、別の命を目で追って観察してる時ってさ、自我を忘れられて

夢中になれるんだよね」

彼女は微笑みをこぼしながら、自身の両手の中で蠢く蟻を柔らかく見つめていた。

「なんか最近思うんだけど、ストーカーもこんな気持ちなのかなって」
彼女の口から呟かれた言葉に私は虚をつかれた様に目を丸くして、言葉を失った。

「それに、人間社会から外れた場所で頑張って生きてる奴らもいるって思うと、なんか、元気出るって言うか」

自信ありげに彼女は私に笑顔を向けてそう言った。変な子だ。なの

に、彼女の台詞には妙な説得力がある。

「蟻ってさ、ひとりぼっちだと他の蟻よりも、早くに死んじゃうんだって」

彼女は脱出を試みる蟻を、わざと右腕に這わせて手首を目線の位置まで持っていく。

「なんで？」

唐突な雑学に私は率直な疑問を口にする。

「わかんないけど、多分人間と一緒になんじゃないかな」

「一緒？」

「そう、だからこいつも私と一緒に。孤独死する運命なのかもね」

その先に私は何も言い返せなかった。彼女の手首を横切ってゆく蟻を、まるで記念日に恋人から貰ったブレスレットを初めて身につけた時の様な愛おしそうに細めた目で見つめる彼女が、恐ろしくも美しくて仕方がなかったからだ。その瞬間、私は思い知らされた。私と彼女の間には一本の線が引かれていて、私は彼女がいる向こう側までこの線をまたいで行くことは一生ないと。私はそこまでこの世界を見放せはしないし、虫がうじゃうじゃいるかもしれない暗闇の中に、飛び込んで行けはしないのだろうから。

そんな彼女と再び言葉を交わしたのはそれから一年後、中学二年生の夏だった。夏休みが始まる少し前、私は昼休みの間中ずっと、校舎裏の目立つ大きな木を見つめていた。上履きのかかとを持って両方の足の裏を合わせて、音を鳴らす。パン、パン、パン。ああ、またやってしまった。私が呆然と立ち尽くしていると、夏草が誰かによってかき分けられる音がして、私が驚いて背後を振り返ると、そこには同じく目を丸くして立ち止まっている彼女がいた。どうしよ、なんか言い訳しないと。私は今更もう遅いとわかっていながら両手にぶら下げて

いた上履きを隠す様に後ろへと持っていった。どうしようもない。私は俯いて彼女が先に去るのを祈りながら押し黙る。数分間の沈黙の末、彼女が口を開いた。

「もしかして、それ、誰かに捨てられた？」

目を見張った。けれど、結局私は

「えへへ、えっと、これはその」

乾いた笑いを俯いたままこぼして適当に間をつなぐ。早く、どっか行ってくんないかな。長い前髪の下から彼女の顔色をうかがいながら、彼女の背後にあるゴミ捨て場を虚な目で眺める。チャイム、まだかな。

私は再び目を伏せて、茶色い土の上を這う黒い点の様な虫をひたすら目で追ってゆく。あの時彼女が言っていたことが今更汗と共に身体に染み込んできた。こんなただの現実逃避だ。アイドルを追っかけている時同様、無我夢中にこの世界から自らを切り放す。自身を傍観者へと変容させ、どうしようもない現実としばし別れを果たす。

「なんで、こんな所に」

恨み言の様に、彼女へそう尋ねた。今まで、何度かここを訪れたことはあるが彼女と鉢合わせたことは一度だってない。

「教室にたんぽぽの綿毛が落ちてたから、外に放してあげたくて」

彼女はそう言うと、風が吹いてきたタイミングで摘んでいた綿毛を放し、なびく髪を押さえながら綿毛が飛んでいった方向を見つめた。その彼女の姿を私は眺めながら、柔らかに微笑む彼女にどこか期待してしまっていた。そして、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った時、私はゆっくりと頭を後ろに倒して青空を見上げた。

「教室、戻りたくないなあ」

口から反射的に本音がこぼれ出す。

「じゃあさ、一緒にサボらない？」

彼女が振り返り、とびきりの笑顔を私に向けて言った。多分、私は

その時飛び込んでしまったのだろう。彼女の眩しすぎる光に向かいたいと願った。でも、ほんとうはずっと自身が引きずっている暗闇のような影にも気がついていて、それを簡単に手放せはしないことも知っていた。それでも、後ろめたさも全てここに置いてゆけば大丈夫だと私は不確定にも信じて込んでいたのだ。

「ずっと、気になってたこと言っていいい？」

長谷川さんは地べたにあぐらをかきながら神妙な面持ちで私に向かってそう言った。午後の授業開始のチャイムが鳴ってからも、私達

は校舎裏の屋根がついている日陰で座ったまま動こうとはしなかった。体育座りで私は俯きながら彼女の次の言葉を待つ。

「なんで、眼帯してるの？」

ああ、ですよね。私は苦笑いしながら、どうにかしてこの場所から立ち去れないかと考えを巡らせる。しかし、どうしようもない。今から教室に戻ったところで先生になぜ遅れたのかと問い詰められるだけだ。

「も、ものもらいで」

「でも、それ一年の時からずっとだよ」

「えっと、その」

「ああ、言いたくないならいいんだけど。そのことで何か悩んでるんなら力になりたいなあって思ってる」

そんなこと言われたら、言わざるを得ないじゃないか。

「し、失明、してるの。右眼」

上擦った声で制服のスカートを握り締めながらなんとか口にする。

「そっか、そうなんだ」

長谷川さんは純粹に驚いていた。誰にも言ったことはない。ずっと、ものもらいだと言っただけは、その嘘も通用しなくなる頃には孤独を

選んでじっと停滞していた。

「なんで、隠してるの？」

「えっ、そりゃあ、なんてゆうか、右眼だけ変だから」

「そうゆうもんなんだ。義眼とか作ってもらえないの？」

素直な質問を長谷川さんはぶつけてくる。

「眼球が残ってる場合、義眼は美容目的とされて全額自己負担なんだよね。うち母子家庭だし、十何万も私のわがままで親に負担かけられないってゆうか」

いい子ぶる自分に辟易しながら苦笑いでそう答える。ほんとうは、

自信がないだけだ。自分にそれだけの価値があると思えない。親に拒否されるのが怖くてずっと黙って我慢してるふりをして、その実恐れ
ているだけだ。

「それなら、みんなにそう言えばいいのに」

長谷川さんの言葉に私は苦い顔で俯く。

「みんな、村主ちゃんのこと厨二病だとか、虐待されてるとか、有る事無い事勝手に噂してるよ。ちゃんと、訂正すればみんなわかってくれるって」

そんなの、無理に決まってる。たとえそれができたとして、わかっ

でもらえたとして、それは私が望む世界じゃない。中途半端な理解ならはなからいらないんだよ。

「でも、もう遅いし、いいの。長谷川さんが知ってくれただけで、もう十分だよ」

私は綺麗事を言って納得のいかない顔をしている長谷川さんへと微笑みかける。

「長谷川さんは、授業サボっちゃって大丈夫なの？」

私はふと疑問に思ったことを口にした。中一の時も確かに長谷川さ

んは学校は休みがちだったが、授業にいないなんてことは一度もなかった気がする。

「ああ、えっと、担任とバチっちゃってそれからあいつの授業もう受けたくないってゆうか」

「へ、へえー」

なんだか闇深そうな話題を振ってしまって、私は後悔と気まずさでなんとも言えない顔をする。

「だ、だってね。聞いてよ、村主ちゃん」

私が反省していた矢先、長谷川さんが突如興奮気味に語り始めた。

「教室でね、昆虫図鑑広げて見てたの。それだけなのに一軍女子に目つけられて、校舎裏のゴミ捨て場にびりびりにページ破かれて捨てられてたんだよ。私、静かに図鑑見てただけで絶対悪くないから、やり返してやったの。主犯の女の大事にしてたイケメンの顔面がプリントされたクリアファイル、ハサミで切り刻んで教室のゴミ箱に捨てたの。そしたら、そいつ授業中急に泣き出してさあ、後から私だけが放課後担任に呼ばれて叱られて、なんか私だけが悪いってなって、ムカついて担任にもブチギレて、その女にも断じて謝らなかった」

ずっと不服そうな顔で長谷川さんは声高らかにそう語った。そして、興奮冷め切らぬまま私に意見を求めてくる。

「村主ちゃんは、どう思う！ おかしいよね、あいつら」

「ええっと、その子は虫が苦手だったのかもね」

頬をかきながらなんとか言葉を絞り出す。

「いや、それはそうなんだろうけど、それならそうと云ってくれればよかったじゃん。言われれば、私だって気をつけるのにさ」

唇を尖らせて長谷川さんはそう呟く。

「でも、そっか、村主ちゃんも虫苦手なんだもんね」

覚えてたんだ。私が見開いていると、長谷川さんは自分の味方をしてくれないことに凹んだのか、地面に項垂れてしまった。

「えっ、ああ、ごめんね。私はその、どっちの気持ちもわかるってゆうか」

私は慌てて両手を振ってフォローに努める。

「そっか」

それでもまだ長谷川さんは俯いたままだ。

「で、でもね。好きになりたいって思ってるよ、虫のこと、ほんとに」
落ち込んでしまった長谷川さんに申し訳なくなつて、私は咄嗟に言

葉をつけ足した。

「ほ、ほんと。じゃあさじゃあさ、今度一緒に昆虫博物館に」

ぱっと目を輝かせて私に近寄ってきた長谷川さんに私は狼狽えた様に目を泳がせる。

「えっ、えっと、その、いきなりはちよっと」

「そ、そうだよね、いきなりはね」

納得してくれたのか長谷川さんは案外簡単に引き下がってくれた。それからしばらくの間長谷川さんは考え込んだ後、自分の昔の話をしてくれた。

「い、いやさ、私もわかってはいるんだ、虫が苦手な気持ち。私も昔は普通に虫嫌いで、弟がいるんだけどその弟が小学校低学年くらいかな、私が高学年だった時だから、その頃カブトムシ飼いたって突然言い出して、虫かごにでっかいカブトムシ捕まえてきてさ、私、猛反対しちゃったんだよね。家の中に虫がいるだなんてありえないって大号泣で駄々こねて大喧嘩。でも、結局弟が折れてくれて、涙目で外にカブトムシ返しに行ったんだよね。凶鑑捨てられた愚痴をさ、晩ご飯食べてる時話してたら弟にこの前そのこと言われて、私全然覚えてなくて、今更だけど悪いことしたなって思った。今はさ、弟は休みの日

は部屋に引きこもって友達とオンラインゲームしてばっかで外なんてもっぱら出ないし、家にゴキブリ出たら私以上に大騒ぎするし、でも、きつとあの頃の弟にとってあの虫かごの中の小さな命ってとんでもない価値があって、大切なものだったんだよね。でも、あの時の私も本気で嫌だったからどっちが悪いとかじゃなくて、だから、無理に好きにならなくていいと思うんだ。なんで、村主ちゃんは、虫を好きになろうだなんて思ったの？」

優しく質問されて、私は頭が真っ白になった。答えは既にあつたようでなかったような気もしていて、なんて説明していいのかわからな

い。

「え、えっと、それはその」

首に手を当てながら私は愛想笑いをして、自分にも他人にも嘘をついて誤魔化してしまった様なそんな気がした。

「虫ってさ、いつから人類の敵になったのかね」

唐突に長谷川さんは言い始めて、一人で顎に手を当てて考え出す。

「虫って、人類の敵なの？」

私が訝しんでいると長谷川さんが説明する。

「いや、なんかそうゆうイメージない？ 人間の負の感情の象徴とゆうか、アニメとか漫画とかでも呪いだの化け物のモチーフになってたり、現実だと幻覚症状の代名詞だったり、あとシンプルにゴキブリはみんな怖いじゃん」

「ああ、言われてみればそうかも」

私はその例えに納得して頷く。

「なんでなんだろうなあ」

長谷川さんは腕を組みながら首を傾げる。

「やっぱり、見た目なのかな。見た目だけで気持ち悪いって決めつけ

られちゃうのは、可哀想だよね」

私がそう言うと、長谷川さんは深く頷いた拍子に俯いたまま考え込んでしまった。

「村主ちゃんも、虫のこと、気持ち悪いって思うの？」

気持ち悪い、か。私はしばらく地面を見つめながら考えた。でも、やっぱり何か違うと思うって首を振ってから顔を上げる。

「気持ち悪いって言うよりかは、畏怖の念に近いんだよね」

「畏怖の念？」

長谷川さんが首を傾げる。

「生きてることが、怖いんだ」

虫が、生きていること自体が何よりも怖い。死骸ですら、それは虫が生きていた証で、恐ろしくなる。

「そっか、わかんなくもないんだけどね。なんか、人類も弱くなったよね。虫なんて慣れじゃない？ みんな教室に虫が入って来たごときで騒ぎすぎなんだよ。あいつらはこっちにかかってこようだなんて思ってもないし、こっちにはいくらでも戦って勝てるポテンシャルもあるのに。自然を遮断してコンクリートの上で生活してるから駄目なんだよねえ」

長谷川さんは人類を見損なったとでも言うように呆れ口調で意気揚々と話す。

私は長谷川さんのその発言に苦笑いしながら考える。慣れか、そうは言われても慣れるまでの時間が苦痛すぎるんだよなあ。やっぱり、幼少期から虫と触れ合わせて苦手意識を軽減させるくらいしか人類に手はないんじゃないのかなあ。

「それじゃあ、今日は村主ちゃんが虫を克服できる様にいろんな虫をとりあえず、遠目に観察してみよう！」

またいつもの校舎裏で私は長谷川さんに言われるがまま放課後ここにきて、虫を好きになるための活動をする。あの言葉を本気にしたらしい長谷川さんはちよくちよく私を誘ってはここで虫の話を聞かせてくる様になった。

「あっ、うん。頑張る」

私は笑顔を繕う。いや、仲良くなれたのは良かったけど、私本気で虫苦手なんですけど。

「うーん、なんか虫いないね」

長谷川さんは草むらに入って行ってはしゃがみ込んで目を凝らし

たり、木の棒を持って葉っぱを突いてみたりして、虫を探してくれたがなかなか見つからないらしい。もうすぐ夏休みのこのシーズン、外はかんかん照りで蝉の鳴き声もう聞こえて来たりして五月蠅くはあっても、その音源の姿は影を潜めている。もちろん何かしら虫は宙を飛んでいて、私たちの間を何食わぬ顔で横切ったりするのだが、そいつらは観察には不向きである。長谷川さんは遂には持参した虫眼鏡までもを駆使して徹底的に地面を這う虫を探し始めた。私は手持ち無沙汰であの大きな木の下に吸い込まれるようにして歩いて行く。

「あつ、そこ、蚊がたくさんいるから気をつけた方がいいよ」

私の背中に向かって長谷川さんが声を掛けてきた。私はびくっとして足を止めて長谷川さんへと振り返る。

「なんで、ここって蚊が多いのかな？」

「ああ、えっと、それは蚊柱って言ってね、蚊たちの出会いの場なんだって。木とか電柱とかを目印に蚊たちがいっぱい集まって来て婚活してんの。面白いよね、こんな校舎裏でさ。なんか、最近はあるま見なくなったんだけど、知らずに近寄ったらびっくりしちゃうよ、特に虫嫌いだったら」

「そう、なんだ。長谷川さん詳しいんだね、やっぱり虫のこととなる

と」

私は普通に勉強になって長谷川さんへ笑い掛ける。

「いや、これは普通に気になって調べただけ、虫全然詳しくないよ。最近好きになったばかりだし、図鑑もボロボロにされちゃったし」

またあの件の恨み言を言う長谷川さんに私は呆れ顔で視線を逸らす。どんだけ根に持つんだこの子。

「あ、あと、蝶々^{はびる}でいいよ！」

突然、ぱつと顔を明るくして長谷川さんの高い声が響いて、私はまた彼女へ視線を戻す。

「蝶々^{はびる}ちゃんは、よくここ来るの？」

「ああ、うん。授業サボる時とか」

「そっか」

早速下の名前で呼んでみたことを恥じて、私は視線を逸らして俯いたが、口角が無意識の内に上がってゆく。なんだか懐かしい感覚だ。友達ってこんな感じなのかな。今更、友情なんてものを私は曖昧に思っているだけでいい。

「蝶々^{はびる}ちゃんは、なんで虫が好きになったの？」

うだるような暑さの中、私はそう言えば訊いてなかったと思いそう質問すると、蝶々ちゃん^{はびる}は快く話してくれた。

「病んでる時ってさ、無性に虫が目につくんだよね。俯いてるからなのかな、よくいるじゃん、周りの子に馴染めなくて校庭の隅で蟻の行列見てる小さい子とか、そんな感じ。私、中一の初めはグループ入ってて友達もいたんだけど、小学校から仲良い子でさ、あの頃は校庭で鬼ごっこしてればそれでよかった。でも、中学に上がってからみんな急に変わっちゃって、推しって言うの？ イケメン俳優とか、男性アイドルとか、そう言うの興味なくて、あんまり好きじゃなかったん

だよねそっち系の文化。でも、一応輪の中には入れてもらえてて話には入ってるけど私は適当に頷いてるだけで、正直クソつまんねえの。退屈でしょうがなかった。でも、一人になるのは怖かったから」

そう言えば、確かに中一の初めは蝶々ちゃん^{はびる}は陽キャグループの一員だった気がする。それがいつにまにか孤立してて、元のグループの子達とはずっと気まずそうにしていた。

「そんな時さ、窓の外に虫がいたんだよね。窓際で話してたから、すぐ側の窓の外側に虫が張りついてて、無意味に上に行こうと必死なんだよそいつ。馬鹿みたいでしょ、上に行ったところで意味なんてない

のに、どうせすぐ落っこちちゃうだけなのに。ほんと、今思うとくだらないって思うんだけど、その時なんでか引き込まれちゃったんだよねそいつの姿に。もうどんな虫だったかも全然覚えてないんだけどさ。病みと虫って親和性高いと思うんだよね。あの時の私の状態が病んでいたのかはわかんないんだけど、みんなに合わせられない自分が悪いんだってそう自分のこと責めちゃってたから。この広い世界で、あんな小さな身体で誰も助けられない孤独を抱えて、それでも一人で生き抜こうと必死なそいつを応援したくなってきた、いつのまにかそいつのことが愛おしくなっていた。なんかその時、生きることその虫を見

て客観視できて、自分も自由に生きていいんだって思えたんだよね」腕を後ろで組みながら照れくさそうに言った蝶々ちゃんはびるは、とても良い笑顔をしていた。くだらなくなんてないと思う。なんとなくだけれど、蝶々ちゃんのグループの子は蝶々ちゃんが凝視するその虫の姿を見て、気持ち悪いだとか、もしかしたら、死ねばいいのになんてことも口にしたのかもしれないとふと想像した。そして、彼女はそれらを耳にして彼女らを見放して、孤独を選んだ。極端な子だ。全て空想に過ぎないけれど、彼女はそんな性格故にここでは生きづらいのだろう。

「あつ、カメムシだあ」

蝶々ちゃんが突然そう叫んで、地面を指差しながらその場にしゃがみ込んだ。私はそっちに近寄って行って前屈みで俯いてカメムシとやらを探す。確かにそこにはひっくり返った状態で土の上に横たわるカメムシがいた。

「し、死んでるのかな？」

私が眉間に皺を寄せていると蝶々ちゃんは木の棒でそいつの身体を突く。そうすると、そいつは微動だにしなかった。

「死んでるね」

そう呟くと、木の棒の先で死んでいるカメムシを元の状態にひっくり返してあげる。

「優しいね」

私が呟く。

「そう？」

「お墓とか作るの？」

私は手伝おうとそう訊いた。

「いいの。虫の死骸なんてそこらじゅう転がってるし、命ってそうやって繋いでゆくものだから。もう数え切れないくらいこいつらの仲間

は死んでってるんだろうしね」

彼女は悲しそうにそう呟いていた。

「私、バライティ番組の罰ゲームで無理矢理人に虫食べさせるやつ、嫌いなんだよね。理不尽に命を奪っておいで、その死骸を人に嫌々食べさせてそれを見せ物にするって、悪趣味だよね」

握っていた木の棒を脱力させて落として、蝶々ちゃんはそう続けた。「ごめんね、なんか急に思い出しちゃって。この前ネットで調べたんだけど、子どもって遊びで残酷に虫の命を奪ったりするでしょ。私も小さい頃ふざけて蟻の巣の穴に砂詰めたりしたことあるし、誰しも通

る道だよね。でも、ちゃんと後悔してるんだよ。最低だったなって、けど、そうゆう子どもの行動を危惧する親の相談への解答がさ、虫を殺すことは命の尊さを学ぶ大切なきっかけで、そうゆう教育だから心配しなくて良いって書いてあって、理屈はわかるんだけど、なんか、寂しいなって思ってる」

蝉時雨が突如ボリュームを上げて私の耳を塞いだ。座り込んでいた脚に吹いてきた風に揺れる夏草がかかってくすぐったさに嫌な予感を覚える。私はその場から立ち去りたくて、でも、そうすれば虫が私を襲って来そうな気がしてそこに膝を抱えてうずくまることしかで

きなかった。

「補習って、別のクラスの人たちと合同なんだね」

夏休みに入り、私達は授業をサボっていたつけが回ってきて二人して初めて補習なるものを受けざるを得なくなった。

「まあ、そもそも受ける人が少ないからね」

「そっかし、それもそうか」

さつきから、人の視線がちらちらと私の右眼の眼帯に集まっていた。私のことをある程度知っているクラスの子達ならもう今更私のこと

を気にして見てくることはないから久しぶりの感覚だ。そんな視線に加えて、何かしらの陰口が聞こえてくることも必然である。

「なに、あれ」

「ああ、あれだろ、三組の眼帯女子」

「ものもらいじゃねえの？」

「いや、入学してからずっとだから」

「マジ、なに厨二病ってこと」

「あはは、さあな、そうなんじゃね」

「いや、まじかよきつつ」

「あははは」

隣に座っていた蝶々ちゃんが、勢いよく立ち上がって彼らの元へと歩き出そうとした。

「やめて」

私は咄嗟に腕を掴む。彼女はきつと驚いた顔をして私を見ていたんだろう。私は俯いたまま続ける。

「大丈夫だから」

私はすぐに顔を上げて彼女に笑顔を見せて安心させるつもりだった。けれど、まだあの男子達の会話は終わってはくれないなかったら

しい。

「ってか、あの顔面で眼帯はきつって、可愛ければまあ許せるけど」

「あははは、お前マジ最低だな」

「ええ、でも、お前らも正直そう思うっしょ」

「あはははははは」

手を叩いて笑っていた。そんなことどうでもいいから、余計なことしないで。無意味にもう傷つきたくないんだお願い、わかってよ。かろうじて、まだあの言葉は言われていない。まだ、最低ラインは超えていない。耐えられる。まだ、大丈夫。涙は出ていない、堪えられる。

「ふっざけんなよ」

蝶々ちゃんが歯を食いしばる音がして、その瞬時そんな言葉が床に吐き捨てられた。そのまま私の手を振り払って、蝶々ちゃんは彼らの方へと向かって行った。

「はっ、なにあれ」

「こっわ」

もうすでに周りはギャラリイと化していてあの男子達も蝶々ちゃんの敵意に気づき始めていた。ああ、もうだめだこれ。

「村主は、好きで眼帯してるわけじゃないんだよ」

見てられなかった。凄みの効かせた声で、きつとそいつらを思い切り睨みつけて立ち向かったのだろう。でも、別にいいんだよ。好きで眼帯をつけたってそれは個人の自由で。そんな理屈じゃ、勝てない。

「はっ、じゃあなに、なんでずっと眼帯してるわけ？」

リーダー格的な真ん中の男子が、椅子に大きくもたれかかりながら座って顎を上に向ける。

「そ、それは、病気だからしかたなくて」

「病気？ 一生眼帯つけてなくちゃいけない眼の病気なんて俺、厨二病しか知らないんだけど」

「だから、厨二病とかじゃなくて、その」

蝶々ちゃんは私が失明していることを隠したがっていたことは覚えてくれていたらしい。言い淀む蝶々ちゃんに男子達は容赦なく追い討ちをかける。

「どうせ嘘なんだろう、厨二病の次は虚言癖かよ」

「類は友を呼ぶってやつ？」

「だから、嘘じゃないんだって」

「だーかーらー、証拠は証拠？　ないんでしょ、じゃあ嘘じゃん」

蝶々ちゃんまでもが、虚言癖呼ばわりだ。何なんだよこいつら。も

う、八方塞がりだ。私の取れる方法なんて一つしかない。証拠なら、決定的なものがここにある。くだらない。皮肉的過ぎるけど、まるで嚴重に保管されていた封印を解くかのように私は自身の右眼を隠し続けていた眼帯をゆつくりと外した。男子達はおろか周りにいた誰もが私の右眼に釘づけとなった。それから聞こえてきた囁き声、呟き、独り言、なんだっていいけれど、それがずっと頭の中でリフレインして離れない。

「はっ、なにあれ」

「黒目なくね」

「見えてないの？」

「失明？」

「こっわ」「グロすぎ」

「なにあれ、きつも」

「気持ち悪い。」

事実、その場で実際誰かがそう口にしたのかは定かではない。それは私自身の声だったのかもしれない。それでもずっと、その言葉が脳裏にこびりついて、離れることはない。まるで、永遠に私の周りを飛び回る蠅のようだった。それからすぐに眼帯をまたつけて、私は教室

を出て行った。またすぐに蝶々ちゃんが追って来て廊下で叫んでいた。

「ごめん、村主。私、余計なことして」

「いいよ別に」

間髪入れずに吐き捨てる。謝らないでよ、惨めになる。ああ、ダメだ。涙は止められず、溢れ出てくる。右眼から涙が落ちても、眼帯に滲むだけだから拭う必要性がないことが、また私の頭を重くして左からの涙を引っ込めて床へと俯かせた。

ああ、またここに来ちゃったな。校舎裏、大きな木の下。今日は蚊

がうじゃうじゃ飛び回っている。蚊柱だっけ、蝶々ちゃんが言ってたな。肩をすぼめて身体をできるだけ小さくして泣いている自らの姿を覆い隠す。はあ。俯いて地面をただ見つめる。ああ、上履きで来ちゃった、バカだな。そう思って、笑えて来て私は自身の上履きに手をかけようとした。

「村主！」

名前を呼ばれてはっとして振り返った。そうしたら案の定そこには蝶々ちゃんがいた。ここまで追って来てたんだ。びっくりした。もう、一人にして欲しかったのに。蝶々ちゃんは息を切らして私を呼んだき

り、なにも言えずに口をぱくぱくさせていた。だから、私が話すしかなかった。どうしたらいいのかわからなくなっている蝶々ちゃんに苦笑いをこぼした後、私は再び大きな木を見上げて語り出した。

「小学生の頃、緑内障にかかって右眼を失明した。久しぶりに学校に行ったらさ、その日の朝仲の良かった女の子に言われたんだ。気持ち悪いって。別にいじめられたりはしなかったよ。ただ、そう、事実を言われただけ。だから、眼帯をつけるようになったし、中学もわざわざみんなと違うところを選んだ。やり直したかった。でも、やっぱり無理だった。ごめんね。私が上手くやれなかったただけなんだよ」

手をいじりながらそう語った後、私はゆっくりと彼女を振り返った。彼女は申し訳なさそうに俯いていた。それだけで十分だった。彼女が同情してくれる、ほんとうにそれだけで十分嬉しかったんだ。

私達はその後誰にも見つからないよう教室に戻ろうとして校舎の裏口へと向かった。蝶々ちゃんも上履きのまま校舎裏に出て来てしまっていたらしい。一度上履きを脱いで砂を地面に叩き落としてから向かうように私もそれに倣って上履きを脱いで地面に俯くと、

「うわぁ」

よく見たらセーラー服のタイにカナブンがくっついていて。思わず身体を揺らして私が後ずさると、カナブンはびっくりして翅を広げて慌てて飛んで行った。だが結局のところそいつはすぐ近くの地面に背中から直撃して、ひっくり返ったまま動かなくなってしまった。

「し、死んじゃったかな？」

私が青白い顔で蝶々ちゃんを見て訊く。

「だ、大丈夫だよ。これぐらいで死なないし、死んだふりしてるだけじゃない？」

「で、でも、痛かったよね」

「大丈夫だよ。虫って痛覚ないから」

おろおろしている私に蝶々ちゃんは冷静に返答する。

「えっ、なんで？」

「虫ってさ、どのみちすぐ死んじゃうから。痛みを記憶して、回避行動に役立てる必要性がないから、痛覚はいらないんだって言われてる」
淡々とした蝶々ちゃんの説明に私は虚をつかれて呆然としてしまった。痛みを覚えておく必要がない。そんなことがあり得るんだ。死んだふりなのか、はたまた私が殺してしまったのか定かではないかな
ブンの腹を見つめながら私は俯いて思った。

「なんで、愛してあげられないんだろう」

呟いた言葉は果たしてその耳に届いたのだろうか。私には判断できないことだった。

あの後、私達は補習に遅れたにもかかわらず先生に叱られはしなかった。私の目のことはいつのまにか学校中に広まっていた。新学期、教室に行ったら突然一学期の始めは仲良くしていたが目のことを聞かれ、私から放れてしまった三人グループの大人しい女の子達が私の机に話し掛けにやって来た。要は謝罪とこれからは仲良くしようと言

う内容だった。嬉しくはなかった。どうせそんな偽善長くは続かないだろうと、そう思ったから。でも、それからしばらくは蝶々ちゃんとは一切喋る機会もなく、私は校舎裏には立ち入られずに、彼女達と行動を共にした。

「眼帯、外したっていいんだよ」

「そうだよ。みんなに気遣って隠すことないよ」

「ね、瀬名^{せな}ちゃんはなんにも悪くないもん」

気持ち悪。それが私の率直な感想だった。大嫌いなはずの言葉を一番に使っていたのは私自身だ。その生温い優しさが気持ち悪く、不快

で仕方がない。最低で、最悪だ。私は初めからこんな人間だったんだ。中身までもが、醜く自分自身が気持ち悪くて堪らない。私はずっとフラストレーションが溜まっていたんだと思う。だから、あの日私はあの場所へと放課後、久しぶりに向かったのだ。

あれを初めてやったのは中一の夏、一学期の終業式の後だった。あの日は、確か入学当初から入れてもらってたグループの子達に眼帯のことをまた尋ねられて、もう限界だと思ってグループを抜けたすぐ後のことだった。みんなは一緒に帰るところ私は逃げ出して来て、でも、

今帰ってもあの子達に会ってしまうのが嫌でどこにも行けず停滞していたんだ。鞆と、持ち帰らなくちゃいけない上履き、でも、上履きを入れるビニール袋を忘れて私はそのままずっと手に持っていた。あの日は暑かったから校舎裏の木の下で涼もうと思ったのに、そこには蚊が大量に群がっていて、邪魔だった。始めは驚いて咄嗟に持っていた上履きを叩いてみただけだった。そうしたら、効果抜群あいつらはすぐにどっかに散ってって、気分が良かった。それから、思うままに何度か上履きを叩いて、蚊が全部散っていった時、胸がすいたんだ。今まで抱え込んでいた苛立ちがほんの一瞬だけ、消えたんだ。いいよ

な、こいつらは全く同じ見た目の仲間がたくさんいて。いつも、私は退く側だった。だから、私の行動一つで道が開けることが気持ち良かった。それから、何度かムカつくことがあったらわざわざ外に上履きを持って行ってあそこで叩いて、音を鳴らした。蚊を払うのは楽しかった。私はまた停滞していて、いつのまにか孤独の中にいて、邪魔な存在に囲まれていて、羽音が耳障りで、消えたくて、全てを消し去りたくて、必死だった。正義感、使命感、なんだって良かった。苛立ちが、暴れたくてうずうずしている腹の虫が鎮ればなんだっていい。上履きで払うだけじゃ物足りなくなつて、下の方へと逃げてゆく蚊を口

ーファァで踏み潰した。ずっと、怖かった。もし、左眼も見れなくなったら、私はこんな虫すら殺せない弱い存在になる。私は暗闇の中、ぶつかってくる全てになすすべなく立ち尽くすしかない。気持ち悪さほど、そんな不安も、絶望も、孤独も、全てを包み込んで忘れさせてくれるものなんてないんだと、私はそんなことを呆然とした頭の中で、確信していた。

「何、してんの」

黒く塗り潰されていた思考がクリアになって私ははっとして彼女を振り返る。彼女は驚愕の表情で私を見つめていた。何、してんだろ。

冷静になった。でも、もう戻れない。

「虫なんて、ほんとは大っ嫌いだった。気持ち悪くて、その自覚がなく、こっちはことはお構いなしにぶつかって来て、醜くて、惨めで、頭悪いくせに自由に生きてて、ムカつくんだよ」

「虫が好きになりたいってのも全部嘘？」

震える声が響く。

「虫くらい、死んだっていいじゃん」

「そう、かもね。」

「でも、今の村主、気持ち悪いよ」

虫でも見る様な目で、虫唾が走るとでも言った風に彼女は私を虫以下と捉えていた。どっちの眼も見えなかったら、私はこんな風にはならなかったのかな。私は力が抜けた様に地面に体育座りをして項垂れた。しばらくそうしていると、脚に違和感を覚えて顔を上げると、そこには黒い点の様な虫が私の脚を無遠慮に這っていた。そいつを払う気力すら起きずに私は泣きながらそいつに向かって、心の中で叫ぶ。こっちは散々お前らが生きてること知らしめられて来たのに、なんでお前らは、私も生きてるって全然分かってくれないんだよ。

村主がいじめられているわけじゃないことは薄々勘づいていた。だからって、あの日校舎裏で何で村主がわざわざ上履きを持って来て何をしていたのか見当もつかなかった。蚊柱にわざわざ近寄って行って、蚊を追い払って、逃げ出す蚊を踏み潰してストレス発散していただなんて信じたくなかった。蚊くらい殺していいし、虫くらい死んでもいい。分かってはいる。自分だってそうしているし、そう思っている。でも、寂しかった。それはまるで、ちっぽけで何も持っていない私も理不尽に殺されたって、無慈悲に死んだっていいとそう言われている様で嫌だった。実際、そうなのかもしれない。人間だって、理不尽に殺

され、無慈悲に死んでいる。それでも、簡単に受け入れたくはなかった。理解できない。意味がわからない。気持ち悪い。生きてきて何度も味わった受け入れたくない現実。でも、思考を停止させようとは微塵も思えなかった。もしあの時あの窓際で、あの虫が窓の内側にいたのなら、ガラス窓一枚その隔たりがなかったのなら、私があゝの虫を叩き潰して、あの日々もやもやとしていた胸がすいたとしたら、私は村主と同じ道をたどっていたのだろうか。薄っぺらい同情と、気休めの共感。こんな解像度の低い妄想でしか、私は気持ち悪い世界と折り合いをつけることができない。

「こんなところで、何してんの？」

次の日、村主を探して放課後三組へ向かったが村主はもう既にどこかへ行ってしまった。机にまだ鞆は置いてあったから私は雨の中傘も差さずにあの校舎裏まで走った。その実、村主は雨の中傘も持たずに校舎裏の屋根が出てている場所に体育座りをして、ぼーっと雨を見つめていた。

「蚊に、刺されたい気分だったから」

そんなことを虚な目で口走った村主は可哀想なほどやさぐれてい

た。

「あの蚊、ユスリカって言って似てるけど、ほんととは蚊じゃなくてね。人間の血は一切吸わないんだって」

村主は目を見開いてから、すぐに悟った様に目を細めて抱えた膝におでこをつけた。

「あいつらに、殺されたかったのにな」

「ごめん。」

私が謝ると、今度は目を丸くして村主は頭を上げて私をじっと見つけた。そんな驚くことかな。だって、仲直りしたいんだもん。

「なんで、」

「人の命の価値って、虫をいくら殺したって許されちゃうくらいあるんだよ。だから、もっと愛してあげてよ、自分のこと」

村主は目に涙を溜めて唇を噛んでいた。涙が雫になるその瞬間、村主の腕に一匹のユスリカがとまった。それを村主は払うことなく見つめていた。すぐに雨の中へと飛び戻って行ったユスリカを、村主は触れようとして手を伸ばした。その時、村主は柔らかに微笑みながら目を細めていて、私は唐突にこう思った。傷つくことで愛せるものがあるのなら、傷つけることで愛せるものもあるのではないかと。そして、

それを私は否定できるのだろうか。わからない。けれど、確かなのは虫かごの中の虫然り、囚われた自分自身然り、抱きしめられないものを愛することを美しいとゆうことだけだ。村主はユスリカを見つめながら、自身の膝をぎゅっと抱き寄せていた。

「なんなの、こんな時間に呼び出して」

夏休み後半、あれからほとんど会っていない蝶々ちゃんから夜、急に連絡が来た。ある公園で待っているとのことだった。正直、あれからずっと気まづいまま連絡も取っていなかったから驚いた。しかも、

こんな夜にだ。

「村主、全然連絡して来ないじゃん。待ちくたびれたんだけど」

「えっ、何で私から連絡しなきゃいけないの。用事もないのに」

「こっちはずっと待ってたんだから、村主が元気になるまでさ」

「はあ？」

「まあ、いいや。ちょっと話があつてさ」

蝶々ちゃんはベンチにあぐらをかいて座っていたが、立ち上がって街灯の方へと指を差した。

「何？」

私は言われるがまま、街灯を見つめるがそこには蛾などの虫が光に集まっているだけだ。

「虫が光に集まるのは、正の走光性^{そうこうせい}って言って、そうゆう習性があるからなんだけど。負の走光性ってのもあって、それは光から遠ざかる習性で、例えばミミズとかね」

「それで？」

また、蝶々ちゃんが雑学を言い始めた。これ言うためだけに呼び出したんじゃないよな。

「人間は、正の走光性を持ってるんだよ」

「いや、暗いのが好きな人もいくらでもいると思うんだけど」

私がそう指摘しても蝶々ちゃんは得意げな顔を崩さなかった。

「まあ、でも、暗闇ってやっぱり怖いでしょ」

そう微笑みながら言われて、私はどきっとした。ずっと、自分は暗闇が好きなんだと思っていた。そこが安心して、でも、そこに一人で居続けるのが怖いだけで、襲ってくる虫が怖いだけで。

「惨めだって、思う？ 必死に光に向かってぶつかって行っては傷ついて、滑稽だって笑われる虫たちが」

飛んで火に入る夏の虫。そんな言葉が頭に浮かぶ。滑稽だ。惨めだ。

光がないと進めないなんて、飛べないなんて、恥ずかしい。けれど、暗闇じゃ、傷ついていることも血が出ていることも気づけない、それも事実だった。

「暗闇が怖いなら、進まなきゃ。光に向かって、馬鹿みたいでも、傷つき傷つけることを恐れずに、いっぱいぶつかってこうよ」

そう屈託なく笑う蝶々ちゃんのその綺麗事じみた理屈は、わかっていながらも私がずっと拒絶していたものだった。たとえば、火で焼け死ぬかもしれないとしても、人はそれでも光が見たいものなのだろうか。

「うわっ、びっくりしたあ」

始業式後、私は蝶々ちゃんのクラスの前で蝶々ちゃんを待ち伏せしていた。こんなにも驚かれるとは思わなかった。

「な、何、急に」

めちやくちゃ警戒されてる中、私は笑って言ってやった。

「一緒に帰ろ」

「えっ、ああ、うん。えっ、それだけ？」

「そんだけけど」

帰り道、突然蝶々ちゃんが立ち止まって、指を空へと差した。

「ねえ、見て見て、ちようちよ」

「ああ、ほんとだ」

「指、とまってくれないかなあ」

「無理でしょ」

蝶々ちゃんは少し折り曲げた指を空へと掲げる。そうしたら、ほんとうに蝶がこっちまでやって来て奇跡的に蝶々ちゃんの指にとまった。

「す、すげえ。見て見て、とまった」

私は即座に蝶々ちゃんと距離を取っていつでも逃げれる様構えておく。

「えっ、嘘でしょ。蝶すら無理なの！」

「いや、だって、蝶もほら、よく見るとキモかったりするじゃん」

「いやいやいや、わかってないな村主。そこがいいんじゃない、気持ち悪いほど生きてるのがいいんじゃない」

「はあ、意味わかんない」

「だから、うわあ、待って」

そんな言い争いをしている間に蝶が空へと帰ってゆく。

「だから、生きるって気持ち悪いってことなんだよ」
私はその日、初めて蝶をはつきりと見つめた。そして、命が綺麗で
あることをその時私は生まれて初めて、思い知らされた。